nakanohana

toudai no ohanashi

中ノ鼻灯台のお話

Toudai no ohanashi

みなさんは灯台が眠るのを見たことがあるでしょうか。というのも、灯台というのは夜に働くものです。小さな子どもや森の木々が静かに寝静まっている頃、真っ黒な海の上を行きかう船が昼間の太陽のように頼りにしているのが灯台なのです。その仕事といったら、大変なものです。十三秒のうち三回の閃光を、日が沈んでから朝が来るまで、休むことなく届けなければならないのですから。夜じゅう働き続けた灯台は、朝日がのぼるとともにその日の役目を終えて、すうっと光の目を閉じるのです。そうです、皆さんがいつもさんさんとした太陽の下で目にしている灯台は、実は夢の中にいるのです。

藤岡さんと中ノ鼻灯台

野賀の岬に立つ白くて小さな灯台、中ノ鼻灯台。明治二七年から目の前の海を行き交う船の航海の安全を見守って来ました。

明治二七年といえば、約百三十年前。人の一生より長い時間をかけてこの場所で海を見つめてきた灯台には、どんな記憶が眠っているのでしょうか。

「子供のころ、中ノ鼻灯台の中に入って遊んでいた」という、神浦地区の藤岡政治（ふじおかまさはる）さん。

二〇二〇年の秋にご自宅へ伺ってから一年間、直接お会いしたり、手紙でのやりとりを通じて、昭和一四年～二十年頃の思い出を聞かせていただきました。

中ノ鼻灯台の思い出

文. 藤岡政治さん
絵. てるいひろえ

昭和十四年頃より昭和十八年頃までの思い出を書いてみた。

当時（現清風館）の土地は私の家の農地で麦やさつま芋を主に栽培していた。まだ道路も無く伝馬船で灯台の側を背負って海岸まで運び船に積んで帰って居た…。小学校四、五年頃だったので弟と二人で母に連れられて手伝っていた。その折り弟と二人で灯台に入ってよく遊んでいた。当時灯台の外壁は灰色であった。

灯台の点灯はガスであった。カーバイトガスで（カーバイトを水に沈めて作る）その使用済みの残りが多くあり外壁を塗っているのを珍しく不思議な思いで見ていた。（石灰を混合していたかは不明）当時カーバイトは大下の灯台（運びその後中の鼻灯台へ船で海岸まで来て三人が背負って運んでいた。一人は鏡を磨き二人はガス発生タンクの中を取替えをしていた。当時道路はまだ無くて道路ができたのは昭和十三、四年頃だったと思う。陸軍の工兵隊が来て海岸の岩盤を爆破させ村民も協力して作った。

道路が出来るまでは私たちは山道を通って畑に行き母によく手伝わされた。弟と二人で灯台に入って遊び母によく叱られた。昭和五十年頃だったか木江町が国民宿舎を造る計画があり土地を売却して国民宿舎きのえが出来その後は清風館となり現在に至る。中の鼻灯台には色々な思い出が多くあり時々立寄って眺めることもある。

藤岡さんのご自宅にて、昔の写真を見ながらお話を聞かせていただきました。

これが今清風館があるとこやね。ここがうちの畑で、上もうちの畑だった。子供の時はこの道路がなかったけえ、山を通ってね、畑へ行った。僕らが子供の時にはどうしても手が足りないから母親によく連れられてね。

灯台の思い出はね、私ら遊ぶところがなかったからねえ、あそこ行っちゃあ遊びよったわけ。

－灯台の中で何をして遊ぶんですか？

いやあ何するこたあない回ってみたりね。そいであそこのねえ、大下の灯台から船が来るのがわかるわけよ。そしたらね、人が上がって来るのよね。ほんでそれを見るんよ。係の人も「面白いか」言うから「はい」ってね。灯台の灯が回るのが不思議でならんのよ僕ら子どものとき。ね、あんたら知っとる？灯台の灯が回るのか、ガラスが回るのか、わからんでしょ？それが説明聞いてもわからないのよ。そして係の人もよくわからないのよ（笑）不思議なかった。

だからこれを、僕この前聞いて書いたんだけどね。この炭酸カルシウムかな。こういう仕組みも、見えるわけね。カーバイトの原石を水につけたら蒸発してガスが発生する。それが不思議なかった。ストンと下がるでしょ。で、少なくなったらまた補給するから上がるでしょ。それでこれをする人が大下から船で来るのが見えるわけ。下に伝馬で来てから。カーバイトとかを負って上がるわけ。だから僕らも面白いわいね。こまい時だから好奇心あるでしょ。「これは何するんだろうか」言うてね。あんたらでも、わからんこと何しよるんかなって思うことあるでしょ。それと一緒。「あー来た来た！」って騒いで。そしたら母親に怒られてね。

聞き書き

2021年10月21日

聞き手　反岡和宏（写真）
太田智え
てるい ひろえ

藤岡さんのお手紙より、カーバイトによるガス発生の仕組み

畑は清風館の上全部がうちの畑だった。今でいう2反ぐらいあったの。じゃけえ芋や麦がものすごいできるわけよ。負うてから船積むのにね、1日や2日じゃ済まないの。僕は学校の高学年だけど、子どもら芋獲りゃせんわあね（笑）見よるだけ、芋集めるだけでね、そじゃけんこれだけの畑作ってもね、運ぶのが1日じゃ済まん。3日も4日もかかる。

それでその後、芋が済んだら麦植えるでしょう。麦も、稲だったら藁があるんですよ。麦の藁はあまり利用価値がないからね、畑の上で全部こいで、穂だけにしてね、それを袋に詰めて負うてくる。で、後の残ったものは芋植えるところに寄せて、畝を作って、それが肥料になる。あとはアマモね。アマモと藁と一緒に置いて芋を置いてね。アマモは今の木江中学校のあたり、あの辺がいっぱいあったのよ。竹の竿を2本こうしてくくってね、舟に乗ってアマモを押さえて、キリキリっと回して。流れてくるアマモもあるけれど、切ったアマモの方が肥料として効くわけ。生じゃけえね。流れるのはあまり、長けて栄養がないのが流れる。だけどそれも拾って、一緒にしてね。ほんで半年くらい塩抜きをして。半年くらい置いとったら雨が降ったりして塩が抜ける。それを畑に負い子で運ぶ。しんどかったんよ。家族だけでやるからね。それぞれの家でそれぞれの畑あるでしょ。全部子供の手が必要になるわけ。あの当時はね、みな家族でやりよった。

畑に行くのにね、船で行く場合があるの。麦とか芋とか作物ができたら船で運ぶんじゃけえ。灯台の下へ。今海水浴ができてるあそこに船つけて、灯台の向こうっ側から背負子負って、それで芋とか麦を、船で運ぶの。その道がもうない。だから僕ら畑手伝いに行っても、遊ぶ方が多かった（笑）灯台の中で遊んでいた。

－灯台も昔は灰色に塗られていたんですよね。そうそうそう。戦時中は飛行機から見えるでしょ。そじゃけえ、うちらの昔の家でもね、白壁の家でもね、塗りよったんですよ。うちの昔の写真があるんじゃがね。昔はね、これね、よもぎを煮た分をね、いわゆる野草の青汁を塗れえて。よもぎとか野草の煮たものを、青い汁が出るでしょ。それを塗らされたの。敵からね、白いものは見えるから。だから昔は灯台もね、真っ白な灯台はなかったんよ。他のところは知らんよ。でもここらの灯台は全部塗られた。昔は戦時中はいろんなことをさせられたのよ。

畑から作物を運ぶ道があったという場所から、灯台を背に眺める海

僕らも兵隊行くときにはね、うちから二人行っとんじゃがね、あいさつして、あの当時は桟橋ないから全部船で行くのよね。見送る人が手振ってね、船が沖で二回周るの。でこっちの南側はね、竹原に着かんの。すぐ忠海で須波へ行って、尾道。ほいで向こうは中央丸とかは竹原。出征兵士を見送る人はね、船がこう、沖で二回くらい周るのよ。それを見送ってくれるの。戦地行くんじゃけえね、やっぱり亡くなったりする方がおるでしょう。だから最後の見送りよね。

僕らもあんたら生まれてない頃、昭和十九年に十五歳で兵隊に行ったんだもの。十五歳よ。大竹の海兵団にね。これが呉の鎮守府に帰ってきて、十六歳よね。大竹の海兵団から横須賀の学校に行ってるの。空襲で横須賀もやられて、私らの戦友も戦死した。僕は呉の鎮守府に二十年の五月に帰ってきた時にも、七月の大空襲で呉がやられて、市内が半分やられとんのよ、一晩の間にね。それで僕の戦友も目の前で死んだんです。そういう思い出もあるしね。

色んなこと経験してきました。本当に、まあ長く生きた。戦争体験者いうたら僕らぐらいしかおるまあ、もう。僕ら九二歳、僕らが最後よ。昭和十九年いうたらね。昭和二十年四月に卒業して海兵団に入った人がおるかもわからんけど、僕らが最後よね。だから人の戦死も見たり、色んなこと経験したの僕らで終いじゃけえね。あんたらも、沖浦にこういう人がおったのう思うて、覚えててください。

藤岡さんは、このお話をお聞きした5ヶ月後の二〇二二年三月に、永眠されました。

二〇二〇年秋の中ノ鼻灯台一般公開の日、実際に灯台の足元に立って、畑から海へ降りていく道があったという場所について藤岡さんに教えていただいたとき、海を眺めながら語られた言葉があります。

「懐かしいんだ。そじゃけん、昔のまんま海は」

そのとき藤岡さんの心に浮かんでいた、八十年前の少年時代に畑から見ていた海。時間を巻き戻してその海を見に行くことはできないけれど、一緒に並んで「昔のまんま」の海を眺めることで、藤岡さんと灯台だけが知っている思い出に少しだけ触れられたような気がしました。

藤岡さん、ありがとうございました。

レンズの赤い線はなに？

中ノ鼻灯台のレンズに付いている赤い細長いアクリル板。横島北西方にあるセクリノ瀬という浅瀬を教えるために付いていて、その海域を通ると赤い光が見えるようになっています。

LEDだとこの赤い光を照らすことが困難なため、光源がLEDに変わる灯台もある中、中ノ鼻灯台のレンズはフレネルレンズのままなのだそうです。

発行　大崎上島町観光協会　2022年10月30日　発行

HP「風待ちの島ナビ」 https://osakikamijima-navi.jp　E-mail info@osakikamijima-kanko.jp

osakikamijima_setouchi_japan　こちら大崎上島　風待ちの案内所